小須戸小学校だより

NO.２　　令和4年 7月15日（金） 発行

「子どもたちに感動体験を」

校 長　河野 健一

近年，日本の子どもは他の国の子どもに比べ，自己肯定感が低い傾向にあることが問題視されています。小須戸小学校の子どもも例外ではありません。

要因としては，子どもの頃の，感動体験不足が指摘されています。現在，物質的には豊かな世の中になり，生活は便利になりましたが，その一方で直接的な体験の機会が身の回りから失われてきました。感動体験は，自己肯定感と自己効力感を高めることが立証されています。子どもたちが夢を広げていく過程において，自己肯定感や自己効力感は大変重要な意識であり，そうした精神状態を生むための感動体験の機会を得ることは，さらに重要であると考えています。

そこで，夏休みにはぜひ子どもたちに自然体験や生活体験，お手伝いなどで感動体験をしてほしいと願っています。無理のない範囲で子どもに様々なことに取り組ませ，感動体験を積み重ねていくと，自分の長所と短所を理解できるようになり，ありのままを受け入れられる様になります。また，何らかの目標に対して「自分は達成する力がある」と考え，自分を信じる力も高まります。文部科学白書のデータによると，感動体験で得られる自己肯定感は自然体験や生活体験，お手伝いで高水準になっています。子どもが「やってみたい」と興味をもったことに対し，大人が支援を行うことで感動体験を深めることができます。特にお手伝いは子どもにとって新しいことができるだけでなく，親の役に立つことができますので，自己肯定感や自己効力感に大きな影響を与えます。ただし，お手伝いなら何でもいいというわけではありません。お手伝いにおける感動体験は，自主的に行ったことや，お手伝いが「家族や自分の生活と繋がっている」と感じたときに起こります。皿洗いや片付けなど，子ども本人や家族から見てはっきりと成果が分かるもの，自分が家族の役に立ったと実感できるものに当てはまるお手伝いが感動体験に繋がりやすいです。

小須戸小学校では昨年より夏休み共通の課題はありません。子どもが自分で考え，決めた課題を取り組みます。これも，子どもたちの自己効力感を高める手立てとして取り組んでいます。

感動体験は学力向上や人間関係にも繋がり，生きる力を育みます。長い夏休みですが，子どもとともに大人も感動体験をしたいものです。

小須戸小学校の学び方

研究主任　植田 一宏

小須戸小学校では，自らの学びを舵取りする子どもを育むため「学びのユニバーサルデザイン」に基づくテクノロジーを活用した授業改革に3年前から取り組んでいます。学びのユニバーサルデザインは，Universal Design for Learning を和訳したもので，UDL と略称で呼ばれることも多いです。

UDL に基づくテクノロジーを活用した授業の一場面を紹介します。例えば，授業の振り返りを担任に提出することがあったとき，3年前には，ノートかプリントに鉛筆で書いて，担任に手渡しすることしかできませんでした。その後に一人一台端末が実現したことで，タブレットへの提出が可能になりました。タブレットに手書きで書くことも，タイプで打ち出すことも，音声入力も可能になりました。さらに言えば，振り返りを提出することが目的なので，文字でなく，音声そのものや動画で提出することもできます。このように目的に応じた選択肢を提供することで，子どもたちが学びやすくなり，やる気も上がり，学びに向かう主体性が高まります。この具体例は簡単な一例です。学校での教育活動全体で，学びやすい環境を提供したり，子どもたちと一緒に学び方を考えたりすることが重要です。また，自らの学びを舵取りすることは大人でも難しいですが，難しいと言って，舵取りする経験なしに，自立することもできません。子どもたち一人一人がやる気をもってチャレンジして，試行錯誤しながら自分にとってよりよい学び方を獲得していくことが大事だと考えます。チャレンジには失敗も付きものです。失敗をそのままにしたら，また同じ失敗をするかもしれません。失敗をよき教訓になるようにするには，どうしたら，次はよりよくなるか一緒に考える大人の存在が大きいです。授業ではその大人は先生ですし，ご家庭では保護者の皆様です。家庭と学校で子どもたちを見守りながら育てていきたいです。

さて，もうすぐ夏休みが始まります。昨年度と同じように，子どもたちが主体的によりよい方法を選択し，自分で決めた学習に取り組みます。やり方はそれぞれ違ってもよいですが，夏休み明けに確認テストや振り返りのアンケートをすることで，自分が選択したことがよかったか考える機会を設けます。その振り返りをスタートに，授業や家庭学習でよりよい学び方をさらに考え続け，冬休みの学習方法を改善できるようにしていきます。

６年生が１年生にロイロノートの操作方法を教えました。１年生は操作を覚え，６年生はよりよい教え方を考えることができました。

授業では，子どもたちが安心して学習に取り組めるように，学習する場所も選択できる時間を設けることを心掛けています。

小須戸小学校の生活指導

生活指導主任　添田 真里

小須戸小学校では，自分で考えて「望ましい行動」ができる子どもを育てます。

小須戸小学校では，昨年度，子ども達の行動指針「小須戸っ子マインド」を設定し，子ども自身が自分で考えて「望ましい行動」ができるような働き掛けをしています。

間違えた行動をしてから子ども達を叱るのではなく，子ども達に望ましい行動を教えたり，考えさせたりした後で活動させることで，「自分が望ましい行動を選択した」という経験をたくさんさせたいと考えます。子ども達の望ましい行動を見かけたら，全ての職員がその行動を価値づける働き掛けができるようにしています。

行動には，責任が伴いますので，自分で間違えた行動を選択してしまったら，自分でその後どうするのかを考えさせます。失敗しても，その後の行動を自分で選択し，直していくチャンスを与えます。

この取組みを【PBIS…ポジティブな行動介入と支援】と言います。

ただし，危険な行動やほかの友達を傷つけるような行動には，その場で毅然と対応しています。また，担任が生徒指導上の問題を抱え込み，問題解決が遅くならないよう，情報の共有を図り，場合によっては，生活指導主任や管理職を交えて，チームで対応するようにしています。

また，いじめを防止するような授業を道徳や学級活動で随時実施しているほか，児童生徒の自殺や希死念慮が近年増加していることから，今年度より，国・県の指導で「SOSの出し方」という授業を4年生以上で行っています。

さらに，児童理解のため，日ごろのコミュニケーションの他に，定期的に「友達とのかかわりについてのアンケート」「教育相談おしゃべりタイム」「学校適応感尺度アンケートアセス」「よりよい学級のための尺度 Be-SAFE アンケート」を行い，普段の生活からは見取れない子ども達の気持ちを少しでも把握できるように努めています。

保護者の皆様や地域の方からの声によって，子ども達が抱える困り感に気付くこともしばしばです。大変感謝しております。夏休み中も，何か変わった点がありましたら，学校までお知らせください。